

ドゥダメルの勢いが止まらない

32歳になったばかりのベネズエラの天才指揮者グスタボ・ドゥダメルの勢いが止まらない。「ドゥダメル」なんていう名前は数年前までは一部のクラシックマニアを除いてほとんど知られていなかったと思う。20代半ばで「シモンボリバル・ユースオーケストラ・オブ・ベネズエラ」を率いてベートーベン5番・7番（2006年録音）やマーラー5番（2007年録音）の交響曲をレコーディングしたあたりから、注目される存在になった。

若さや技術だけではない。形にとらわれない演奏スタイルに、格式と伝統で凝り固まるクラシック界は度肝を抜かれた。おそらく2004年の「第1回グスタフ・マーラー国際指揮者コンクール」に優勝したときの審査員だったエサベッカ・サロネンらが彼の「革命児」としての才能を評価したからではないか。フィンランド生まれのサロネン自身も若くしてロサンゼルス・フィルハーモニーの音楽監督・首席指揮者に抜擢されただけに、有望な若手への期待のかけ方はわかるような気がする。

クラシック音楽といえば、身なりを正し、きちんと座って、品位を保って演奏するのが常識だ。しかしドゥダメルが率いたベネズエラの英才たちのオーケストラは違う。振るほうも弾くほうもみんなラテン系だからか。それとも個人の才覚なのか。クラシック演奏会のプログラムに、少しばかり肩の力を抜いた曲をしのばせ、開放感を漂わせる。ドゥダメルは団員を

立ち上がらせ、ぐるぐる歩き回らせることもある。まるでプラスバンドのような「動く演奏」なので、見ていて楽しい。それでいてオーケストラは確かな技術で音楽自体を乱さない。

ニューヨークやロンドン、ウィーンなどで有名オーケストラの演奏会を後方から眺めるとすぐに気づくことがある。見事に白髪とピカピカ頭がホールを埋めているのである。若者はいたとしても、カネがないので値段の安い後部座席にいて、全く存在感がない。欧米ほどではないが、日本のコンサートも年齢層は高い。

若者に人気のないクラシック音楽をどう盛り上げるか、世界共通の課題といえる。古式豊かなクラシックを変えるのは至難の技だし、これまでは冒険した人はいても、スタイルを崩すまでにはいかなかった。しかしドゥダメルはさまざまなクラシックの常識を覆す可能性をもつ。ベテラン指揮者たちは自分たちが成しえなかった「クラシック改革」を彼に託しているかもしれない。

2008年のザルツブルク音楽祭にオーケストラごと招かれたのもベルリン・フィル常任指揮者のサイモン・ラトルらの推薦があったといわれる。ザルツブルク音楽祭といえば、毎年世界の天才的音楽家を集めることで知られる。「ラテンアメリカ生まれの傑出した才能」というだけでも話題性は十分だった。

ともかくドゥダメルは若さあふれる歯切れのいい演奏をする。「シ

モンボリバル・ユースオーケストラ」によるチャイコフスキー5番（2008年録音）を聴けばいい。団員も20代がほとんどだから、あまりに元気がよすぎて「そんなに急がなくても」という感じさえする。オーケストラの演奏会は最終的には、技術よりも気合いで勝負が決まると思うので、彼の指揮はもちろん二重丸だ。

ドゥダメルは5歳ごろから「エル・システム」と呼ばれるベネズエラ独特の音楽教育システムの中でバイオリンを始めた。1975年に発足したこの音楽教育運動は子どもに無料で楽器を貸し出し、音楽によって人間性を養うのが狙い。全国に300近い教室があり、貧困層の子どもも受け入れることから、これが治安対策にも役立っているという。

団員はプロとして生活し、給与が払われ、寄宿舎もある。その代わりに内外ツアーへの参加が義務付けられている。「エル・システム」から生まれたシンデレラボーイがドゥダメルだった。

そのドゥダメルが今年9月にミラノ・スカラ座のオペラを率いて日本に来ると聞いてことのほかうれしくなった。2008年に来日したときは管弦楽コンサートだったが、今度はオペラの「リゴレット」だ。彼は世界の超一流オーケストラの多くを20代で指揮した。ラテンアメリカとクラシックは結び付きにくいのが、彼がどんな“革命”を起こすか、今後の楽しみである。



アルゼンチンに“神風”吹くか

アルゼンチンにとってはまたとないタイミングで、同国枢機卿がラテンアメリカ出身として初めてローマ法王に選ばれた。フランシスコ法王である。アパート住まいで電車通勤する質素、儉約の人といわれる。現在のフェルナンデス・キルティネル大統領（女性）とは意見の対立が伝えられたこともあるが、そこは大人のお二人。法王就任後、すぐに両者はバチカンで和やかに会談したという。

ところが、会談の内容が政治絡みに及んだことがわかり、にわかには注目を集めている。新法王に対して「英国との領有権問題の仲介をしてほしい」と直談判したというのだ。30年前のフォークランド（スペイン語ではマルビナス）戦争のことである。アルゼンチン側は「自国の領土だ」と主張し続けているが、ローマ法王庁としては個別の案件にかかわることは避けたいところ。それを承知で話題にした同大統領は世界への「アナウンス効果」を狙ったのだろう。

フェルナンデス大統領は国内では不人気らしい。2012年後半には場当たりの経済政策と高インフレに国民が反発し、大都市では反政府デモが頻発した。また同大統領は憲法を改正し、15年の大統領選挙で3選を狙っているとの話も聞こえてくる。

2001年のデフォルト（債務不履行）宣言以来、経済は好転しつつあるものの、国際社会の信頼は完全に回復していない。国際通貨基金（IMF）との関係はギクシャク

したままだ。ラガルドIMF専務理事はアルゼンチンの不透明な経済指標の発表数字に「イエローカードを出した」と言っている。インフレなどの数字は「粉飾」の疑いが濃厚だというのだ。個別の国に警告めいたことを専務理事が口にするのは異例だが、ここは冷静になったほうがいい。

それぐらいではアルゼンチン政府は動じない。かつて、夫のキルティネル元大統領（故人）も「IMFより国民が大事」と公言していた人だけに、IMFにとっては夫婦そろって手ごわい相手というわけだ。

アルゼンチンは資源も食料も十分あるから、仮に経済制裁を受けても困ることはない。自活できるから他国のいうことは素直に聞かない。日本在住のアルゼンチン人に聞くと「そういう面もある」と認めたりするから、これも当たらずといえども遠からずなのだろう。

アルゼンチン政府は今年になって明らかに英国に対していちゃもんを付け始めている。1982年4月2日、太平洋戦争以来の稀有な大海戦が地球の反対側で起こった。それがフォークランド戦争である。南極に近い英領フォークランド諸島にアルゼンチン軍が上陸し一時占領したことから、当時のサッチャー英首相が激怒し、空母を含む艦隊を仕立てて島を奪還した事件だ。

艦隊の交戦でお互い被弾したが、アルゼンチンのほうがダメージは大きく、巡洋艦の沈没で数百人の兵士を一度に失う悲劇も起きた。

アルゼンチン軍が“敗北必至”の戦争を仕掛けた理由は最初からはっきりしていた。「国民の不満をそらす戦争」である。当時のガルチエリ大統領は混乱する経済に打つ手が見つからず、戦争という「最後のカード」を切った。加えて、付近の海底は石油埋蔵量が大きいとみられていたこともある。

アルゼンチン政府は、19世紀初めから遠方の英国が同諸島を実効支配する「不条理」を世界に訴えている。あの英国を再び敵に回せば、内政問題を抱える現政権への求心力も高まる。フェルナンデス大統領にはそんな思惑もありそうだ。これに対し、英国はこの3月にフォークランド自治政府の住民投票を実施、住民の99%以上が「英国残留」を選択した。しかし同大統領は「住民投票は茶番」と切り捨てた。

フェルナンデス大統領には外交による得点が必要なのだ。とはいえ今の国際社会では「戦争」のカードは使えない。もちろんアルゼンチン国民は戦争など望んでいない。

さてどうしたものか、と思案していた矢先のローマ法王誕生である。アルゼンチン人がカトリックの総本山のトップに君臨したとなれば、これほど強い味方はない。アルゼンチン政府は、言葉は悪いが法王の威光を“利用”しようと対英国作戦を軌道修正した可能性もある。

（日本ブラジル中央協会 顧問
和田 昌親）